

キャプナ★ニュースレター

愛・地球博の「地球市民村」でCAPNAが「子どもと話そう館」を運営してから、もう1年がたちます。予想を上回る盛況で、来場者の評価も高く、多くの人々にCAPNAの存在を知っていただけました。でも、成果が問われるのは、これからです。

1年前の、目が回るような忙しさと、熱気を思い出しつつ、愛・地球博のテーマ「持続可能な社会づくり」を目指していきたいものです。

Vol. **46**

市民講座から 子どもの立場で聴き、教わる

2月23日、「子どもたちに教えてもらったこと」と題して、暁学園の臨床心理士、藤澤陽子さんを講師に市民講座を開きました。

藤澤さんは養護施設で出会った子どもたちから「(講座で)僕たちのことを話してほしい。僕らが言っても大人は聞いてくれないから」と言われて来たと話してくれました。本来、安心と安全を与えられるはずの家庭で虐待され、さらに施設でもまた傷ついた彼らは、生き抜いていくために暴言を吐き、問題行動を起こし、また自分を故意に傷つけたりします。さらに、大人になり社会に出てからも、それは「生きにくさ」と言う形で現れ、彼らを苦しめています。

そんな彼らに対し私たちが出来る事は何なのでしょう。

藤澤さんは「子どもの立場で、子どもの見たり、聞いたり、体験したことを聴いていく」と言います。それらの話は大人のした話や書類上の事実とは異なる場合が多く、それこそが「子どもから教えてもらう」ことなのだそうです。

今回、彼らが藤澤さんに託した「言葉」を私たちは忘れてはなりません。



つなぐ会シンポ報告

2月26日、名古屋市女性会館で「多様化する私達の支援と援助～今・これから～」をテーマにシンポジウムを開きました。

CAPNAの基本姿勢 ①上下関係を作らないネットワークでお互いを信頼しあう ②1人に仕事や権力が集中しないようにしよう ③フットワークの良い組織にしよう ④情報公開のできる運営をしていこう ⑤成果を子どもや社会に還元していこうとの確認からはじまりました。また、CAPNAの実践活動を報告し、隙間のない虐待防止活動への意欲を高めることができました。

「つなぐ会」は、CAPNAの活動と地域で虐待予防・防止活動を行っている会員をつなぎ、情報交換しながら市民団体としての力をつけていくことを目指して、2003年5月に発足しました。これからも、CAPNAに期待される時代のニーズに即した活動を一緒に創っていきたいと考えています。(相談援助部部長 岡崎仁美)

ご寄付 次の皆様からご寄付をいただきました。お礼申し上げます。

(2-4月分、順不同、敬称略)

- 【団体】、名古屋キワニスクラブ、Smile Heart Club、名古屋名城ローターアクトクラブ 他匿名で3件
- 【個人】 牧野慎裕、小出砂恵子、奥野幸代、藤井直行、萬屋有子、矢満田篤二、白石淑江、林真人、横井 歩 他匿名で12名

CAPNAニュースレター46号 (隔月刊30号)

2006年5月12日発行

発行 特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

編集 CAPNA事務局広報チーム

事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-404 TEL052(232)2880、FAX052(232)2882

「愛着の絆」を結ぶために

人間の脳は、胎児期から3歳までが急速に発達します。その間に、保護者から暴力や育児放棄を受けたりすると「愛着障害」と呼ばれる脳機能のさまざまな問題が起きることが知られています。4月2日、CAPNAは、愛着障害を防ぐ先進的な取り組みで知られるアメリカ・オレゴン州の「子どもの家庭のための委任機関（OCCF）の運営責任者カレン・ヴァン・タッセルさんと、愛着障害の研究者ヘネシー・澄子さん（東京福祉大学名誉教授）を招き、育児支援の専門講座を開きました。その概要をお伝えします。（矢満田 篤二）



赤ちゃんの脳に備わる7つの機能を、毛糸で表現

赤い糸、緑の糸

オレゴン州では「健康な出発プログラム（ヘルシー・スタート・サービス）」という名称で、育児不安などの問題をかかえそうな家族を対象に、出産前からの育児支援プログラムを実施しています。タッセルさんは、このプログラムを担当する調整官です。

講座の最初は「愛着障害」の解説でした。タッセルさんは、ヘネシーさんの通訳で、7人の受講者に毛糸の玉を持ってもらい、赤ちゃんの脳の触覚・臭覚・言語・情緒・聴覚・視覚・味覚の7つの機能を説明しました。最初の赤い糸は、母親と赤ちゃんとの濃厚な関わり。次の緑の糸は、乳児院の保育者と赤ちゃんとの薄い関わり。

赤い糸の時は立体的に張り巡らされた脳のネットワークが、緑の糸になると、うまく広がりません。とても視覚的な説明でした。

次に、ヘネシーさんが「アタッチメント：愛着の絆 なぜそれが大切なのか」と題し、29枚のスライドを使って、乳児期から成人までの脳の発達段階を説明しました。

「親と子の愛着の絆は子どもの一生の幸福の鍵となる」、「それは貧富にかかわらず、親のだれもが子どもに与えることができる」と結んで愛着形成の重要性を強く印象付けました。



講演するタッセルさん（右）とヘネシー澄子さん

本人の希望に添ってサービス

午後は、タッセルさんが「健康な出発プログラム」について、詳しく説明しました。

オレゴン州は、日本全土とほぼ同じ面積を持ち、カスケード山脈を挟んで、緑豊かな西部と、砂漠が広がる東部に分かれています。

OCCFのスタッフは、わずか25人ですが、既存の福祉・保健・教育などの行政機関や民間の協会・企業などを結んで、子どものために、虐待を防止し、早期の教育に集中し、資質の高い保育を行う目標を掲げて「健康な出発プログラム」をはじめ、

緊急支援保育園の運営、裁判所による子どもの代弁者指定、少年非行の防止、地域活動への支援などの活動を行っています。これらが安全ネットとなって子どもたちを健康に育てることで、将来の犯罪、精神疾患、虐待、失業、薬物中毒、不健康、貧困などによる財政支出の増加を抑制しています。

最初の予防策が「健康な出発」支援。まず、初産を控えた女性に、産婦人科の医師が州のプログラムについて説明。女性がサービスを受けることに同意すれば、支援スタッフが面会します。読み聞かせの絵本や手づくり人形をプレゼントしたりする中で、母親の様子を探り、育児への意欲や不安、精神状態などを探ります。

そして、育児不安の高い家庭を重点的に支援しています。家庭訪問の第一の目標は、親子との信頼関係を作ること。赤ちゃんの成長に応じて、起きてくる問題とその解決の方法を指導し、家族間の支え合いや「地域から親へ」の支援体制を築くための援助です。

オレゴン州は、92年に起きた悲惨な虐待死亡事件をきっかけに、虐待・ネグレクトの防止を目指して育児支援の法律を制定。94年から8つの郡（日本の県に相当するエリア）で取り組み、それが大きな

な成果を挙げたため、2001年からは36郡のすべてで実施しています。

良い点をほめることから

その結果、支援を受けた家族は、受けていない家族に比べ、2歳までの幼児の虐待発生率が、半分になったそうです。

タッセルさんは、愛着障害が影響する慢性疾患、生産性の低下、犯罪の増加、次世代への不幸の連鎖などの問題を挙げ、「健康な出発に使う1ドルは、その後に起きるさまざまな問題の解決のために費やす4ドルに相当する」と説明。早期の取り組みの大切さを訴えました。

また、スタッフの訓練や、燃え尽き防止などのためのメンタルヘルスにも力を入れていることを強調しました。

スタッフの力を伸ばす方法について、タッセルさんは「私たちは、親に接するとき、親の良い点をほめて自信を持たせている。それと同様に、私はスタッフの長所を見つけ、上からではなく、対等の立場で学ぶことを大切にしている」と話しました。

経験の豊かさを感じさせる言葉でした。

どうもありがとう

『イオン』幸せの黄色いレシートキャンペーン&贈呈式のご報告

会員の皆さまのお住まいのお近くにイオンのお店はありますか？

イオンの各店舗では毎月11日に「幸せの黄色いレシートキャンペーン」が催されています。この日にお買い上げいただいたレシートの合計金額の1%が登録しているボランティア団体に振り分けられ、その金額分の事務用品などがイオン店舗で購入できる仕組みです。

各店舗に登録されているのは主に地域のニーズに合わせたボランティア団体ですが、CAPNAは「子どもの虐待防止」というコンセプトをたくさんの人に知ってもらうため、できるだけ多くの店舗に登録をお願いしています。

さて、この11日に登録団体のスタッフがそのお店で「レシートをぜひ我が団体にっ！」と声を張り上げてお願いできるキャンペーンがあります。今回CAPNAは1/11にジャスコワンダーシティ店、2/11に瀬戸みずの店へ参加する事が出来ました。やはり、キャンペーンに参加すると金額がぐんと上がるため、スタッフもつい熱が入りました。

また、合計金額は半期ごとに集計して各団体に報告されます。同時に、店舗によっては交流会も兼ねて贈呈式を行なう場合もあります。CAPNAもできるだけこうした場に参加して謝意を表すとともに企業への啓発にもつなげていきたいと考えています。

商品購入が寄付に繋がるというこの素敵なアイデアを、ぜひみなさまにも広く知っていただき、ご協力を仰ぎたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

最後に、イオン各店舗とご協力いただいたみなさまに、改めて感謝申し上げます。

キャンペーンに参加して

2月11日(祝)、イオンレシートの日にジャスコ瀬戸みずの店でお知らせ活動をしました。初めて参加した私は募金箱のような箱を首から下げて、恥ずかしい気持ちをちょっと脇に置いてお客様に呼びかけました。

呼びかけが上手だった(?)からでしょうか。

「これはなに？」と尋ねてくださる方もたくさんいらっしゃって私が一生懸命に説明している間に箱はすぐに一杯。両手に持ったCAPNAのリーフレットと交換にうれしい気持ちをたくさんいただきました。(榮田)



贈呈式に参加して

4月16日(日)ジャスコ高橋店へ贈呈式に行ってきました。高橋店では1年間で黄色いレシートが約507万円分投資され、その1%の50700円がそれぞれの団体に寄付されたそうです。今後もっと

多くのレシートが投資されるようお店も努力していきたいとのことでした。

贈呈式では、無事に目録を受け取り、写真も撮りました。夫も子どもと一緒にジュースやサンドイッチ、お菓子も出してください、帰日にはお土産までいただきました。(田辺)

ローターアクトクラブとは・・・ロータリークラブの次世代育成指導者養成機関として「地域社会のニーズをくみ取り、奉仕活動を行い、親睦を深めよう」という目的で作られた18歳から30歳までの学生や社会人で構成されている活動団体、世界146カ国に155,000人、6,750以上のクラブがある。



CAPNA(以下C): こんにちは。3月5日のイベントは大好評だったそうですね。お疲れ様でした。ローターアクトクラブの皆さんが今回のようにCAPNAにご支援いただくようになったきっかけを教えてくださいませんか？

ローターアクト(以下ロ): 我々名城ローターアクトクラブの設立は1995年。CAPNAさんと同じです。2000年12月に出版された「虐待データブック2001〜防げなかった死」の編集協力をさせていただいたことがそもそもの始まりでした。CAPNAさんの熱い姿勢に心動かされて我々も虐待への知識が向上すると共に、どうすれば虐待を減らすことができるだろう、我々に何ができるだろう、とクラブ会員が思いを抱くようになっていったのです。

C: そういう思いを込められて今回のイベント開催にもつながったのですね。ローターアクトクラブさんは比較的若い方々で構成されているとお聞きしました。失礼ながら、結婚されていない方にはピンとこない部分もあるのでは？

ロ: 確かにそうかもしれませんが、逆に将来結婚するにあたり非常に勉強になると感じます。昨年10月に晩学園(児童養護施設)のデイキャンプが大高緑地で催されたのですが、実はこれ我々からのアイデアだったんですよ。菱田さん(施設長)の講義で子どもたちへの予備知識を学んでから臨みました。

C: 実際に子どもたちと触れ合っただけですか？

ロ: はじめはどのように接すればいいのか不安でしたが、いきなり抱きつかれてずっと離れないでいる子や肩車のしっぽなしでものごく体力を使いました。でもそういうことよりも、どうしてこんなにべたべたしてくるのかな、と。そのことのほうが気になりました。今回の星が丘テラスのイベントで、普通の親子連れと比較すると理由がよくわかります。親の存在は大きいんだと。

C: そうですね。どんなにか子どもたちは親を求める存在なのだという古くて新しい事実を改めて感じますね。今日はどうもありがとうございました。そして、今後もどうぞよろしくお願いします。

参加した理事からひとこと

イベントはとてもしっかりした気持ちの良い春の日に、星が丘で行われました。ローターアクトの若い男女の方々、それにもう少しだけお年を加えたロータリーの紳士方が大勢集まって、通りがかりの子どもたちに声をかけてゴム風船で動物作りをしたり、輪投げやお手玉投げ、ボール投げなどで点数を競ったりと、午後いっぱい楽しめました。ロータリーの方々の“今日はCAPNAのために”という姿勢が真に響きました。

(理事 菊島)

昨年と同様、三越星が丘テラスにおいて主催のチャリティ活動が行われました。親団体のロータリークラブの応援、また高校生から熟年までおよそ40名の方たちが休みにも関わらず参加されていた。会の方たちが道行く親子にゲームの提案と共に「子どもの虐待防止」を訴えてくださった。チャリティの収益金は、CAPNAの活動に寄付された。お金の支援もありたいが、このような参加型の支援はCAPNAの理念も含めて考えていただく機会にもなり、いっそうありがたい。ただ、ただ、感謝がいっぱいである。

(副理事長 小久保)

去年は寒かったよと聞いていましたので、防寒対策をしていきましたが、小春日和のいい日でした。ローターアクトの皆さんは、上手に子どもたちと触れ合いながら、気分良く帰っていただけていました。また、高校生のスタッフとしての参加に希望を見出しました。来年も是非ご協力をいただけて、われわれの方から体験参加型プログラムを持ち込んで、より積極的に参加したいと考えます。

(理事 高橋)

2006年度上半期の各店舗合計金額は、以下の通りです。

守山店: 9600円コピー用紙、お茶。熱田店: 20700円コピー用紙。南陽店: 9300円コピー用紙。木曾川店: 4100円持ち越し。扶桑店: 25400円コピー用紙、お茶。豊田店: 8500円コピー用紙、カッターナイフ。高橋店: 8600円コピー用紙。瀬戸みずの店: 31000円コピー用紙、スリッパ、お茶ほか。ワンダーシティ店: 31600円コピー用紙、ゴミ袋ほか。弥富店: 8700円ガムテープ、紙ファイル、台所マット、玄関マットほか。



「地域で子どもを見守り育てる」～保育園・幼稚園の役割～

3月1日(木)名古屋市中区役所ホールで、保育園、幼稚園、保健所の関係者230名の参加を得て「名古屋市虐待防止研修会」が開催されました。今回初めて名古屋氏の委託を受けてCAPNAが企画・運営した研修会です。

第一部は徳永家族問題相談室の徳永雅子さんによる「児童虐待 その対応・支援のありかた」と題した基調講演でした。近年、対応の難しい親たちとどう関わっていくか現場の悩む声を多く聞くようになりました。育児ストレスを抱えた親、精神疾患に苦しむ親たちとどうつきあっていくか課題になっています。徳永さんは虐待する親のタイプを分類し、それにより対応の仕方が変わること具体的な事例を挙げて話され、参加者たちは熱心に耳を傾けました。

第二部はシンポジウム。名古屋市児童福祉センター主幹の渡辺さん、名古屋市立宝保育園園長の田中さん、名古屋市西区あかつき保育園園長の山中さんの3人の方々から現場での取り組みの報告がありました。機関と機関ではなく人と人がつながっていくことがネットワーク作りの基本だとあらためて確認する場となりました。「こうした取り組みを園に持ち帰って明日からの実践に活かしたい」「個人情報取り扱いや法的な対応のあり方、リスクアセスメントなどが簡潔に開けてよかった。保育園としての心構えがよくわかった」などの感想が寄せられました。



2006.3.25

愛知県体育館

愛・地球博からちょうど1年。

万博に参加した人たちが冷凍マンモスと再会イベントには3万人の人々が訪れました。

CAPNAブースでは、子どもたちが色々な顔を描いてくれました。その傍らで、親たちは子どもたちへのメッセージを書きました。ボランティアメンバーは一日中

「CAPNAホットライン」のチラシを手渡し、「子育てに悩んでいる方はぜひお電話くださいね」と声を張り上げました。



地球市民村 in あすて

万博会期中の市民村と同じように、ここでも穏やかな空気が流れていました。チャイルドスターズによる紙芝居に釘付けの子どもたち、DVDを初めから最後までじっと見ていた方もいました。メッセージが1つでも伝わっていれば良いと思います。今後たくさんの方に伝えるためには、展示パネルや配布物、呼びかけの工夫が必要だと思います。

市民村の仲間に会えたり、交代で会場を見学したり、スタッフも楽しむことができた1日でした。

「映画」と「お話」のイベントに550名が参加!

キリン福祉財団の助成を得て、3月5日ウィルあいちにおいて、「映画をみて、お話をきいて、考えてみよう『虐待』のこと」を開催しました。事前の新聞掲載や市町村の児童関係窓口、大学、病院などへのチラシ依頼の効果があり、電話やファックスでの申し込みも多く、当日は約550名の参加がありました。

映画『誰も知らない』は以前に親たことのある人にもあらためて感動を呼んだようでした。中村文則さんの講演は、虐待現場を見てしまった体験やそれを通報しなかった後悔の念などを訥々と語られたのが印象的でした。東京から駆けつけてくださったCAPNA会員でNHKアナウンサー阿部陽子さんのデジボよ司会で締まった進行となりました。なお、19名の方に入室していただきました。

受付、案内、託児などに多くのスタッフが参加していただき成功させることができました。

中村さん講演要旨

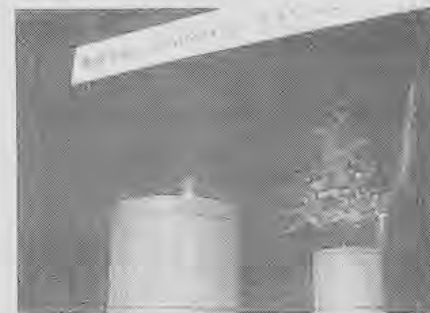
数年前、東京のあるスーパーで母親が子どもを虐待しているのを見かけて何もできなかったことをずっと悔いています。賞をもらって愛知へ帰ったときも駅で虐待される少年を見つけ、その時も警察を呼んでくれと駅員に頼むくらいしかできませんでした。虐待に市民がどう対応するのか難しいと感じています。ぼくの小説の主人公は不遇な子ども時代を経験した青年が多く、自分もそうでした。「虐待」という言葉や暴力の連鎖、フラッシュバックなどの用語は使っておらず、ハッピーエンドにもしていませんが、困難を抱えながらも生き抜いていく姿を書きたかったのです。今後こうしたテーマを書いていきたいと思っています。

中村さんからのメッセージ

CAPNAさんのイベントに参加できたことは、僕にとってとてもいい経験になりました。児童虐待を少しでも防ぐために、これからも微力ながら協力させていただければと思います。

スタッフのひと言

「虐待を自分のまわりでも起こるかもしれないことだと思ってもらえるようなイベントをしたい!」と以前からみんな話していました。そして今回やっと実現することができました。講師依頼やフィルムの手配など初めてのことばかりで、力を貸していただけてやっとなりました。でも、当日は予想以上にたくさんの方が参加してくださり、それまでの苦労もいっぺんに吹き飛ばされました。ご協力いただいた方、ご参加いただいた方、ほんとうにありがとうございました。今回のイベントが虐待について考えるきっかけになっていくっていいなと思っています。



アンケートから

- 虐待されて育ったという会場の方の発言が心に残った。
- 中村さんの勇気、やさしさ、子どもを大切に思う心を受け取りました。
- もっと市内以外にも広めてください。苦しんでいる親子がたくさんいます。どうかそんな人に多く見てもらえるよう頑張ってください。
- CAPNAの会員です。日頃から講演会等へ行くことが多いのですが、今回のような映画は初めて見ました。虐待について知識のあまりない方が見ても、現状を知るよききっかけになったと思います。様々な活動の裏には大変な努力があると思います。これからもこのようなイベントを期待しています。

